

第7回 練馬稲門会 New Year's Concert 2013

2013年1月19日(土) 17:00 開演

練馬文化センター 大ホール

指揮：寺岡 清高

The 7th New Year's Concert 2013
Waseda Symphony Orchestra Tokyo

Saturday, January 19th, 2013 17:00

Nerima Bunka Center, Main Hall

Conductor: TERAOKA, Kiyotaka

主催：練馬稲門会

後援：練馬区

R. シュトラウス
Richard Strauss

交響詩「ツァラトウストラはかく語りき」作品 30
„Also sprach Zarathustra“ op.30

～休憩～
Pause

ヴェィエニャフスキ
Henryk Wieniawski

モスクワの思い出 作品 6
Souvenir de Moscou op.6

ヴァイオリン：天日 萌子 (当楽団第一ヴァイオリン奏者)
Violin: TENNICHI, Moeko

ワルトトイフェル
Émile Waldteufel

ワルツ「女学生」作品 191
„Estudiantina, Waltzes“ op.191

レハール
Franz Lehár

喜歌劇「メリー・ウイドウ」よりワルツ
Valse zur Operette „Die lustige Witwe“

J. シュトラウス II 世
Johann Strauß II

ポルカ「狩りにて」作品 373
„Auf der Jagd“ op.373

アンネン・ポルカ 作品 117
„Annen-Polka“ op.117

ヨーゼフ・シュトラウス
Josef Strauß

鍛冶屋のポルカ 作品 269
„Feuerfest, Polka“ op.269

J. シュトラウス II 世
Johann Strauß II

トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品 214
„Tritsch-Tratsch-Polka“ op.214

ポルカ・シュネル「雷鳴と稲妻」作品 324
„Unter Donner und Blitz“ op.324

練馬区長挨拶



練馬区長 志村 豊志郎

清々しい新春を迎え、第7回 練馬稲門会 New Year's Concert 2013 が、本年も盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

早稲田大学交響楽団は1913年、大正2年の創立以来、日本各地で190回を超える定期演奏会や海外公演を数多く重ねてこられ、本年で創立100周年という記念すべき年を迎えられます。毎年メンバーが入れ替わり、しかも音楽を専攻しない若い学生で構成されている楽団が、このように見事な実績を残されておりますことに、一世紀に及ぶ「ワセオケ」の歴史と伝統の力を感じます。本年も練馬文化センターを会場に、国内外で非常に高い評価を得ている早稲田大学交響楽団の演奏により、コンサートを開催いただくことを歓迎いたします。

本日は、指揮者に寺岡清高氏を迎え、R. シュトラウス、J. シュトラウスⅡ世などの名曲の数々を演奏していただきます。観客の皆さまの心に響く、素晴らしいコンサートとなりますことを期待しております。

また、主催の練馬稲門会におかれましては、発足以来、地域に根ざした活動に取り組みられ、その一環として、本公演を通じて練馬区の文化振興にご協力いただいております。さらに、本年もコンサートの収益金を、練馬区みどりを育む「葉っぱい基金」へご寄付いただけることになりました。71万練馬区民を代表して、心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。

結ぶにあたりまして、練馬稲門会ならびに早稲田大学交響楽団の一層のご発展と、ご来場の皆さまのますますのご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

総長挨拶



早稲田大学総長 鎌田 薫

本日は、第7回となる「練馬稲門会 New Year's Concert 2013」の開催、誠にありがとうございます。この舞台のため、様々な形でご支援、ご協力をいただきました荻野隆義会長はじめ練馬稲門会の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

さて、「ワセオケ」の愛称で親しまれている早稲田大学交響楽団は、1913年に創立された本学公認の交響楽団であり、本年2013年には創立100周年を迎えます。それに伴い、昨年4月からは5回の「創立100周年記念演奏会」を開催しています。年4～5回の定期公演のほか、入学式や卒業式をはじめとする学内の公式行事や文化事業に数多く携わっており、本学を代表する学生サークルのひとつであります。

また、1978年にベルリンで行われた「第5回国際青少年オーケストラ大会(通称カラヤン・コンクール)」における優勝以来、13回に及ぶ海外公演を行っております。昨年2012年2月から3月にかけて行った「ヨーロッパツアー2012」では2ヶ国12都市をめぐり、各地で大きな拍手をもって迎えられました。この「ヨーロッパツアー2012」を通じて、「ワセダ・シンフォニー・オーケストラ」の名をふたたび世界に強烈に印象づけたことでしょう。

さまざまな分野でグローバルな活躍を求められる現代において、団員諸君は世界を舞台に大いに活躍して参りました。そして、この度、練馬稲門会のご協力を経て、地域の皆様にも早稲田発・世界レベルの音楽をお届けできることは、早稲田大学としても大いに誇りとするところです。改めまして、開催にご尽力くださいました全ての関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

本日の演奏会は、指揮者に本学の校友でもある寺岡清高氏を迎えて行われます。ご来場の皆様におかれましては、このたびの演奏会を心ゆくまでご堪能いただき、新春にふさわしい、心やすらぐひとときをお過ごしいただければ幸いです。

最後に練馬稲門会の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げますとともに、今後とも早稲田大学に温かなご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

早稲田大学交響楽団会長挨拶



早稲田大学交響楽団 会長 八巻 和彦

練馬稲門会 New Year's Concert 2013 にご来場いただき、誠にありがとうございます。7回目となる今年も、練馬稲門会の皆様の力強いご支援によって開催できますことを、楽団員と共に心より感謝しております。練馬稲門会の先輩方、練馬区の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げます。

早稲田大学交響楽団（通称ワセオケ）は、1913年に創立され、本年2013年に創立100周年を迎えます。それに伴い2012年4月からの1年間は、5回の「創立100周年記念演奏会」を開催しております。これらの公演に加えメンバー全員が早稲田大学の学部生だけで編成される唯一のオーケストラとして学内の様々な行事にも出演しているわけですが、楽団の活動は海外にも広がっており、昨年の2月から3月にかけても第13回海外公演「ヨーロッパツアー2012」を行い、各地で好評を博しました。4年間で楽団員全員が入れ替わる大学のオーケストラにおいてこの高い演奏水準を維持することは容易なことではなく、楽団永久名誉顧問の田中雅彦先生をはじめとする諸先生方のご指導や楽団員諸君の努力の賜物であるといえましょう。100周年を迎えた本年以降もまた、素晴らしい成果をあげてくれることと期待しています。

本日のプログラムは、新年のコンサートに恒例のワルツやポルカを中心に構成されています。早稲田大学の校友でもおられる寺岡清高先生の指揮の下、明るく楽しい演奏を披露してくれることでしょう。また、冒頭に演奏される「ツアラトウストラはかく語りき」は、来る2月28日にサントリーホールで行われる4回目の創立100周年記念演奏会でも取り上げられます。続く3月20日にも5回目の創立100周年記念演奏会が控えておりますので、どうぞこれらの演奏会にも足を運んでいただければと存じます。

それでは、ワセオケ100周年の幕開けとなる本日のコンサートを心ゆくまでお楽しみください。

楽団員代表挨拶



早稲田大学交響楽団
楽団員代表
コンサートマスター

實島 咲

今年度、早稲田大学交響楽団で楽団員代表を務めさせていただいております、實島咲と申します。本日は「第7回 練馬稲門会 New Year's Concert 2013」にご来場いただき、誠にありがとうございます。昨年度に引き続き、練馬稲門会の皆様からご依頼をいただきまして、このような機会を頂戴し、大変光栄に存じます。

早稲田大学交響楽団は「ワセオケ」の愛称で親しまれる早稲田大学公認オーケストラで、現在早稲田大学の学部生約300名が所属し、楽団員全員で運営しております。1913年の創立以来、早稲田大学のオフィシャルオーケストラとして、早稲田大学の式典行事や、年5～6回の主催演奏会を中心に活動を続けてまいりました。昨年度2月～3月には、第13回目の海外公演となる「ヨーロッパツアー2012」も行いました。今年度は、当楽団にとって創立100周年を迎える節目の年度であり、全5回の「創立100周年記念演奏会」を行っております。5回全ての演奏会において、100年の歴史を振り返り、それぞれの時代の象徴となる曲目を取り上げております。

さて本日は、当楽団創立100周年である2013年の幕開けとして、R. シュトラウス / 交響詩「ツアラトウストラはかく語りき」、ヴィエニャフスキ / モスクワの思い出などをお送りいたします。「ツアラトウストラ」は冒頭部分が映画にも引用されており、多くの皆様に耳馴染みのある曲であると存じます。「モスクワの思い出」では、当楽団第一ヴァイオリン奏者の天日萌子による独奏をご披露いたします。演奏会の後半には、新春恒例のワルツとポルカをご用意しております。優雅で軽快なひとときをお過ごしください。

指揮は、2003年ヨーロッパ演奏旅行および2006年ヨーロッパ公演にもご同行いただいた寺岡清高先生にお願いいたしました。寺岡先生は早稲田大学の卒業生で、当楽団にも所属していらっしゃいました。現在は大阪交響楽団の常任指揮者としてご活躍されています。

「ツアラトウストラ」は2月28日(木)の19:00より、サントリーホール大ホールにて開催されます。「第4回 早稲田大学交響楽団創立100周年記念演奏会」においても演奏いたします。今年度の主催演奏会は第4回創立100周年記念演奏会の後、3月20日(水・祝)の「第5回 早稲田大学交響楽団創立100周年記念演奏会」を残すのみとなります。以上2公演では、当楽団が2000年より取り組んでまいりましたR. シュトラウス作品を4曲取り上げ、今日に至る100年間の活動の集大成とさせていただきます。著名なソリストや指揮者の方々と共に、楽団員一同、さらに研鑽を積んでまいりますので、是非こちらにも足をお運びいただきたく存じます。

末筆ながら、本演奏会を開催するにあたりご支援、ご助力くださいました全ての方々に御礼申し上げます。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

それでは、本日の演奏会をごゆっくりお楽しみください。

指揮：寺岡 清高



© 飯島 隆

早稲田大学第一文学部卒業。桐朋学園大学を経て1992年よりウィーン国立音楽大学指揮科に入学、指揮を高階正光、カール・エステルライヒャ、ウロシュ・ラーヨヴィッチ、湯浅勇治の各氏に師事。1997年イタリア・シエナのキジアーナ音楽院より指揮科最優秀受講生に贈られる「フランコ・フェラーラ大賞」を授与され、1年間ジャンルイジ・ジェルメッティ氏のアシスタントとしてロンドン・コヴェントガーデン、ミュンヘン・フィル、ローマ・サンタチェチーリア管等に同行し研鑽を重ねる。また、2001年より1年半にわたりイタリア・フィエーゾレ音楽院においてカルロ・マリア・ジュリーニ氏より定期的に指導を受けた他、2000年以降ヨルマ・パヌラ、ネーメ・ヤルヴィ両氏の下で研鑽を積む。

1996年プロコフィエフ国際指揮者コンクール第3位。2000年ミトロポロス国際指揮者コンクール優勝。これまでにヴェニス・フェニーチェ歌劇場管弦楽団、サンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団、オランダ放送管弦楽団、モスクワ室内管弦楽団、ウィーン室内管弦楽団を始め、イタリアを中心にヨーロッパ各国のオーケストラへ客演。日本に於いては2001年に大阪交響楽団（旧大阪シンフォニカー交響楽団）を指揮してデビュー。これまでに札幌交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、九州交響楽団等を指揮している。

近年はイタリア・パドヴァ管弦楽団、フランス国立ロワール交響楽団、ブラジル・ポルトアレグレ交響楽団等に客演。2007年4月にはイギリス室内管弦楽団を指揮してロンドンデビューを飾った他、同7月には急病のネーメ・ヤルヴィ氏に代わりラトヴィア国立交響楽団を指揮して、エストニアのオイストラフ音楽祭閉幕演奏会を成功に導いた。

大阪交響楽団とは、2004年1月の正指揮者就任以来緊密な関係を続けている。2011年4月、同楽団常任指揮者に就任。ウィーン在住。

曲目解説

交響詩「ツアラトウストラはかく語りき」作品 30

リヒャルト・シュトラウス (1864 ~ 1949)

交響詩「ツアラトウストラはかく語りき」は 1896 年、リヒャルト・シュトラウスが 32 歳の頃の作品であり、彼が作曲した 7 つの交響詩のうち 5 番目の作品である。初演は同年 11 月 27 日、作曲家自身の指揮でフランクフルトにて行われた。

この作品は言うまでもなく、ドイツの最も偉大な哲学者の一人フリードリヒ・ニーチェ (1844 ~ 1900) の同名著作に刺激を受けて創作された。ニーチェはライプツィヒ近郊の小さな村で牧師の子として生まれ、青年時代にはショーペンハウアーの哲学に傾倒し、大作曲家ワーグナーに出会った。古典文献学の学者として自らのキャリアをスタートさせたが、『悲劇の誕生』をはじめとする発表論文は文献学者たちから批判を受け、大学では孤立することとなった。1878 年に『人間的な、あまりに人間的な』を発表し、それまで傾倒していたショーペンハウアーやワーグナーとは全く異なった思想にいたったことを表明した。その翌年、激しい頭痛と病に悩まされるようになったため大学での職を辞し、療養のために夏はスイスのシルス・マリア、冬はイタリアのジェノヴァ、トリノ、フランスのニースなどを転々としながら、在野の哲学者として活動した。87 年から 88 年にかけて、ニーチェは『道徳の系譜学』『偶像の黄昏』『ワーグナーの場合』『ニーチェ対ワーグナー』『反キリスト』『この人を見よ』など、かなりの質・量の著作を恐るべき速さで書き上げたが、1899 年から狂気の人となり、1900 年 8 月 25 日に亡くなった。



a) フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ

交響詩「ツアラトウストラはかく語りき」は発表当時、作品に過度な哲学的意味を求めようとする向きもあったが、シュトラウス自身は以下のように述べている。「自分は哲学的な音楽を書こうとしたのではなく、あるいはニーチェの偉大なる著作を音楽で描こうとしたのではない。音楽という手段により、人類の発展の観念をその起源からその発展の種々の様相を経てニーチェの超人の観念に到るまでを伝えようと意図した。交響詩全体は、著書『ツアラトウストラはかく語りき』がそのもっとも立派な例証とされた、ニーチェの天才への称賛として企てられたものである。」つまり、表題と作品内容との関係は、単に哲学書の題とそれを描写した音楽という範疇に止まるものではなく、よりダイナミックなものと言うことができる。その証拠に、シュトラウスは総譜の題の下に「フリードリヒ・ニーチェに自由に従った (frei nach Friedrich Nietzsche)」と記しており、その音楽はニーチェの思想と深いかかわりを持ちつつも、爛熟した管弦楽法によって自由に運ばれる。

曲は 9 つの部分に分かれている。それぞれ〈序奏〉〈世界の背後を説く者について〉〈大いなるあこがれについて〉〈よるこびと情熱について〉〈墓の歌〉〈学問について〉〈快癒に向かう者〉〈舞踏の歌〉〈夜に彷徨う者の歌〉と題されており、これらはニーチェの著作のうちから採られたものである。

あまりにも有名な冒頭の「自然の動機」をはじめとして、様々な動機の組み合わせによって曲は成り立っている。自然をあらわすものはハ長調／ハ短調で示されており、反対に人間の精神に

関わるもの（例えば「憧憬の動機」など）は口長調／口短調で示されているが、二項対立的に使用されるものではない。前述のように、この曲は人間の精神の発展史とも言うことができ、世界の根源から「超人」の観念、「永遠回帰」の思想に到るまでを音楽によって表現したものである。ひとたび曲を聴けば、圧倒的な論理構成、それを支える全き管弦楽法に驚かすにはられないであろう。

譜例1「自然の動機」



譜例2「憧憬の動機」



(CL3 大森 脩史)

モスクワの思い出 作品6

ヘンリク・ヴィエニャフスキ (1835 ~ 1880)

ヴィエニャフスキは、ピアニストである弟のヨゼフとともに 1851 年から 1853 年にかけてロシア各地を演奏旅行して回った。その際耳にしたロシア民謡をもとに作られた独奏ヴァイオリンのための変奏曲がこのモスクワの思い出である。題材となった民謡は、ロシアの歌の教師であり作曲家のアレクサンドル・ワルラモフの作った「赤いサラファン (The Scarlet Sarafan)」と「馬に鞍をつけて (I Saddle My Horse)」の 2 曲である。最初に「赤いサラファン」のテーマが断片的にトゥッティで現れると、長大な独奏ヴァイオリンのカデンツァが始まる。カデンツァの後、そのメロディーが完全な形でノスタルジックに現われると、今度はフラジオレットを多用した技巧的なヴァリエーションが展開する。曲の後半になると、農民の踊りを彷彿させるような「馬に鞍をつけて」の主題を用いたヴァリエーションが続き、曲は勢いを増し、熱狂的に幕を閉じる。

(Hr.3 長谷川 史憲)

ヴァイオリン：天日 萌子

2 歳よりヴァイオリニストである母の手解きを受けヴァイオリンを始める。

2011 年学習院女子高等科を卒業、現在早稲田大学基幹理工学部応用数理学科 2 年在学中。

石井志都子、荻野照子、天日倫代各氏に師事。



ワルツ「女学生」作品 191

エミール・ワルトトイフェル (1837～1915)

エミール・ワルトトイフェルは19世紀フランスの作曲家であり、ウィーンのアムステルダム・ファミリー以外で現代も慕われている数少ないワルツの作曲家の一人である。「フランスのワルツ王」とも言われ、上品ながら親しみやすい旋律が特徴である。ワルツ「女学生」はポール・ラーコム (1838-1920) という当時パリで大変人気のあったシャンソン作曲家の歌とスペインの民族的な旋律によって構成されたものである。原題の“Estudiantina”とはスペイン語で〈学生の楽団〉という意味であり、明るく活気に満ちた様子が伝わってくる。

喜歌劇「メリー・ウィドウ」よりワルツ

フランツ・レハール (1870～1948)

ウィーン・オペレッタはスッペやヨハン・シュトラウスⅡ世がこの世を去った後、しばらく沈滞していたが、この「メリー・ウィドウ」によって《白銀時代》と呼ばれる二度目の隆盛を迎えた。フランツ・レハールはハンガリーに生まれた後、プラハで音楽を学び、地方の劇場でヴァイオリン奏者を務めた後、ドヴォルザークの勧めもあって作曲をするようになった。優れた脚本家の助けもあってウィーンで上演されたこのオペラは、連続500回の公演、さらには映画化に到るほどの大変な人気を得た。

ポルカ「狩りにて」作品 373

ヨハン・シュトラウスⅡ世 (1825～1899)

この曲は自身のオペレッタ「ウィーンのカリオストロ」の中の「おお、わたしの駿馬よ」という歌を素材としたものである。軽快に馬が疾走する様子に始まり、森の中で小動物や小鳥と出会う。金管楽器が狩りの始まりを告げるファンファーレを鳴らすと、馬を鞭打つ音、狩りで用いられる鉄砲の音も聴こえてくる。簡潔なつくりではあるが、生き活きとした楽しげな狩りの様子が見事に描かれており、当時50歳を迎えた「ワルツ王」の見事な手腕を聴いてとることができよう。

アンネン・ポルカ 作品 117

ヨハン・シュトラウスⅡ世 (1825～1899)

数多くのワルツ・ポルカを作り、「ワルツ王」と称賛されたヨハン・シュトラウスⅡ世の作品の中でもとりわけ人気の高いポルカだが、作曲のいきさつはそう明らかではない。一説には彼に音楽教育を受けさせた母アンナに感謝の気持ちを込めて作曲されたと言われている。たしかに「年老いた母の手をとり、ゆっくりと歩く」ような温かさにあふれており、彼女のゆっくりとした足取りと、それを見守る家族の様子が聴こえてくるようである。

鍛冶屋のポルカ 作品 269

ヨーゼフ・シュトラウス (1827～1870)

ヨーゼフ・シュトラウスはヨハンⅠ世の二男であり、ヨハンⅡ世の弟である。当初音楽家になる気はなく、工芸学校で学んだ後、工業技師として働いていたが、兄のヨハンⅡ世が体調を崩し代理として指揮をしたのをきっかけに転向、作曲と指揮で優れた業績を遺した。

とある金庫メーカーが二万個製造記念に花火大会を催そうと依頼したのが作曲の契機。金庫作りは鍛冶屋の仕事、そして鍛冶屋も花火大会もドイツ語では同じ“Feuerfest”であり、遊び心と意趣に満ちたこの曲は、鉄床を用いるというアイデアにより、彼のポルカの中で最も人気のあるものとなった。

トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品 214

ヨハン・シュトラウス二世 (1825 ~ 1899)

1854年、休養のために温泉地ガスタインを訪れたヨハン二世はそこでロシアの鉄道会社からペテルブルクの社交界のため、避暑地のパヴロフスクで演奏会の指揮をしてほしいという依頼を受ける。翌年から15年間、彼は毎年春にパヴロフスクに赴くことになった。弟ヨーゼフとの合作「ピチカート・ポルカ」や「クラプフェンの森で」などこの毎年の旅行の中で生まれた名曲も多い。「トリッチ・トラッチ・ポルカ」もその一つである。

「トリッチ・トラッチ」とは、ぺちゃくちゃおしゃべりをする様子のものであり、うわさ好きなウィーンの御婦人方のおしゃべりをユーモラスに描き出している。3分もかからないほどの大変短い曲だが、単なる繰り返しは意外に少なく、贅沢に作られている。

ポルカ・シュネル「雷鳴と稲妻」 作品 324

ヨハン・シュトラウス二世 (1825 ~ 1899)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートでも度々演奏される、非常に人気のある曲である。遠い雷のゴロゴロというどろきは太太鼓で表され、電光はシンバルの鋭い響きで表現されている。とはいえ曲中に恐ろしげな部分や不安にさせるようなところはなく、スリルがありながらも明るく爽快な調子である。

(Cl.3 大森 脩史)

《参考文献》

『最新名曲解説全集 第5巻 管弦楽曲Ⅱ』/音楽之友社

『最新名曲解説全集 第20巻 歌劇Ⅲ』/音楽之友社

『ツァラトゥストラはこう言った 上・下』/フリードリヒ・ニーチェ著 氷上英廣訳/岩波書店

『これがニーチェだ』/永井均著/講談社

Edition Eulenburg, Richard Strauss, Also Sprach Zarathustra op.30 / Ernst Eulenburg.Ltd

《引用画像》

a) Nietzsche by Walter Kaufmann, Princeton Paperbacks, Fourth Edition.

早稲田大学交響楽団

Waseda Symphony Orchestra Tokyo

早稲田大学交響楽団は、ワセオケの愛称で親しまれる早稲田大学の公認オーケストラです。公認オーケストラとしては唯一、同大学の学部学生だけが所属しており、楽団員は約 300 名に上ります。1913 年の創立以来、定期演奏会は 193 回を数え、2012 年 4 月から翌年 3 月にかけては、2013 年に迎える楽団創立 100 周年を記念し、「早稲田大学交響楽団創立 100 周年記念演奏会」(全 5 回)を開催しています。

年 5 ~ 6 回の主催公演、入学式や卒業式をはじめとする早稲田大学公式行事・文化事業における演奏を主な活動としており、このほか年間 20 ~ 30 件の依頼演奏も行っています。

海外公演は、1978 年の第 5 回国際青少年オーケストラ大会(通称カラヤン・コンクール)での優勝以来 13 回を数えます。1986 年はドイチェ・グラモフォンから、2009 年および 2012 年はユニバーサル・ミュージックから、ベルリン・フィルハーモニーにおける公演を取めた CD がそれぞれ発売されました。2012 年 2 月から 3 月にかけて行いました「ヨーロッパツアー 2012」においては、ドイツ、オーストリアの 12 都市を巡り、各地で好評を博しました。なかでも 3 月 11 日のベルリン公演は、2009 年に続き、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のインターネット放送「デジタル・コンサートホール」にて全世界に生中継されました。これらの活動は、テレビや新聞、音楽雑誌などに多数取り上げられています。

故ヘルベルト・フォン・カラヤン氏には、カラヤン・コンクール優勝以来、様々な形でお力添えをいただき、1979 年に早稲田大学より名誉博士号を贈呈した際には、大隈講堂において R. シュトラウス / 「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」の公開リハーサルを指揮していただきました。

指揮者では故ジュゼッペ・シノーポリ、小澤征爾、故ズデニェク・コシュラー、レナード・スラトキン、故岩城宏之、大友直人、高関健、山下一史、児玉宏、曾我大介、寺岡清高各氏、またベルリン・フィルハーモニー管弦楽団や NHK 交響楽団の団員を中心に、多くの方々を指導者・共演者としてお迎えしています。

初演作品も数多く、1927 年にモーツァルト / 交響曲第 35 番「ハフナー」本邦初演、1970 年にストラヴィンスキー / バレエ音楽「春の祭典」アマチュア世界初演、1975 年にショスタコーヴィチ / 交響曲第 13 番「バービィ・ヤール」本邦初演、1982 年に武満徹 / オーケストラのための〈星・島〉(早稲田大学創立 100 周年記念委嘱作品)世界初演、1987 年にメシアン / トウランガリラ交響曲アマチュア世界初演、2000 年に三枝成彰 / 太鼓について〈太鼓協奏曲〉世界初演を行っています。

また、海外公演を中心に、武満徹、石井眞木、外山雄三、芥川也寸志、黛敏郎、三枝成彰ら邦人作曲家の作品も積極的に取り上げています。海外の音楽団体とも共演を行い、国際交流にも貢献すべく努力を重ねています。

これらの活動の成果に対し、早稲田大学から小野梓記念芸術賞を 3 度受賞しています。

<名誉指揮者>

- 大友 直人氏 東京交響楽団常任指揮者、京都市交響楽団桂冠指揮者。東京文化会館初代音楽監督。当楽団1982年ドイツ演奏旅行および1986年ヨーロッパ演奏旅行に随行していただきました。1990年より当楽団名誉指揮者。
- 高関 健氏 1993年1月より2008年3月まで群馬交響楽団音楽監督、2003年4月より2012年3月まで札幌交響楽団正指揮者。当楽団1986年ヨーロッパ演奏旅行、1989年ワールド・ツアー、1992年世界演奏旅行に随行していただきました。1990年より当楽団名誉指揮者。
- 山下 一史氏 1998年までスウェーデン・ヘルシンボリ交響楽団首席客演指揮者、1999年まで九州交響楽団常任指揮者。2012年3月まで仙台フィルハーモニー管弦楽団正指揮者。2008年4月からザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団名誉指揮者。当楽団1989年ワールド・ツアー、2009年ヨーロッパ公演および第13回海外公演「ヨーロッパツアー2012」に随行していただきました。1990年より当楽団名誉指揮者。

<永久名誉顧問>

- 田中 雅彦氏 当楽団OB。元NHK交響楽団コントラバス奏者。1976年より当楽団相談役、顧問、チーフアドバイザー、特別顧問。1986年ヨーロッパ演奏旅行、1989年ワールド・ツアーの総監督としてご指導いただきました。その後も特に企画面でご支援いただき、1992年世界演奏旅行、1995年ワールド・ツアー、1998年ワールド・ツアー、2000年ドイツ演奏旅行ではインテンダントとして多大なご尽力をいただきました。2003年ヨーロッパ演奏旅行、2006年ヨーロッパ公演、2009年ヨーロッパ公演では指揮者として随行していただきました。これらの長年のご功勞に対し、2009年3月、早稲田大学から総長賞が贈呈されました。第13回海外公演「ヨーロッパツアー2012」に指揮者として随行していただきました。

<名誉顧問>

- 山岡 重信氏 当楽団OB。元ニュー・フィルハーモニー千葉常任指揮者、日本大学芸術学部研究所教授。学生指揮者、常任指揮者、音楽監督として1980年に退任されるまでほぼ30年の長きにわたり指導的な役割を担われ、当楽団の発展に大きく寄与されました。

ルドルフ・
ワインスハイマー氏

元ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団チェロ奏者。1978年の最初のヨーロッパ公演以来、第13回海外公演「ヨーロッパツアー2012」に至るまで当楽団の欧州活動に多大なご支援をいただくなど、当楽団の国際的発展に大きく寄与されています。

<音楽顧問>

- 杉原 裕美氏 当楽団OG。在学中、「早稲田大学交響楽団1989年ワールドツアー」において、ソリストとしてウェーバー/クラリネット協奏曲第1番を演奏し、その確かな技術に裏打ちされた豊かな音楽性を発揮して世界各地より絶賛されました。元ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席クラリネット奏者カール・ライスター氏に師事。本学卒業後は、現在に至るまで当楽団の音楽面におけるご指導をいただいております。2010年3月より当楽団音楽顧問。